学生に読ませたい本

小山　吉亮

池上俊一『**動物裁判**』（講談社現代新書、1990 年）

畑を荒らした甲虫の退去を求めて、農民たちが訴訟を起こした。甲虫たちは裁判所の召喚命令に応じなかったにもかかわらず、弁護人の奮闘の甲斐あって、別の土地で暮らすことを認められた。子どもを殺した豚の裁判では、母豚が死刑になったものの、居合わせた仔豚たちは共犯とはされず無罪となった。その一方で、とある森で起きた殺人事件では真犯人が見つからず、結局、その森が死刑判決を受けて木々が伐採された。

中世後期から近世にかけてのヨーロッパでは、このようにして動物や植物が（ときには無生物も）裁かれていた。一体、なぜ？本書は、当時の人々と同じ視点に立ってその思考法や世界観を明らかにし、自然と人間の関係の変化からこの謎に迫ろうとした試みである。

歴史を暗記ものだと考えている人が多いが、歴史とは謎解きであり、その時代の視点で過去を旅する「タイムトラベル」のようなものである。それは暗記に尽きるものではないし、扱われるテーマも多様である。昔の人々は何を考えて、どのような暮らしを送っていたのか。そこに法や裁判はどのように関わっていたのか。このようなことも実は歴史学の対象なのである。

小牟田哲彦『**大日本帝国の海外鉄道**』（東京堂出版、2015 年）

かつての長春駅では、一風変わった「タイムトラベル」を体験できたらしい。満鉄（南満洲鉄道）から向かいのホームの東清鉄道に乗り換えると、時計の針は 23 分進み、日付は 13 日戻るのである。東清鉄道は 1918 年までロシアのユリウス暦と満洲北部のハルビン時間を用いており、満鉄とは日付も時刻も異なっていたのである。

第 2 次大戦以前の日本が海外に領土・植民地（いわゆる外地）を保有していたことは広く知られている。しかし、この時期の大日本帝国については単語と年号を暗記したけれども、どうも実感がわかないという人が多いのではないか。

本書は、当時の乗客の目線に立って書かれた外地旅行の「ガイドブック」である。ここに記された通貨事情や周遊券情報などは、単なるトリビアに見えるかもしれない。また、日本人旅行者の視点から外地について語ることには限界もある。だが、本書を読めば、歴史を学ぶときに必要な「土地勘」が養われるだろう。そして、さまざまなトリビアは謎の宝庫でもある。何か面白そうなテーマが見つかったら別の本を読んでみるとよい。それが歴史の学び方である。